

# 熊本地震が起きた日

4月16日未明の本震により、高野台地区で被災された高橋俊夫さん(黒川)が、14日の前震発生時からの記録を鮮明に記されています。

熊本県には、布田川・日奈久断層があり、この断層を震源とする地震が発生すると言われていた。防災士の資格を取り災害に対する備えはそれなりにし、キャンプ道具や災害時の救助用具などを準備していた。自宅は京都大学火山研究所のある丘の下に位置し、弱点があるとしたら北側の法面くらいだと考えていた。職場(熊本市)では、棚などの耐震固定を提案したり、防災チームに加わり日奈久断層を震源とする地震を想定した勉強会やシミュレーションを行ってきた。

しかし、想定を遥かに超える事態が起きた。

## ▼4月14日

益城を震源とする地震が起

きた。南阿蘇でも大きく揺れしたが、不安定なものが落ちた程度で、被害と言うほどのことではなかった。テレビやネット

で震度7との情報が入ったが、夜間ということもあり出社することは避けた。余震も続いていたし、路面状況が分からないと車での移動は危険だと判断した。幸い、職場の人とはSNSを通じて連絡が取れ、状況を確認しつつアドバイスをしていた。

揺れの大きさは経験したこととがなく、横揺れだったことから「これはもしかして?」震源からは比較的距離がありそう「と思った。日奈久断層を震源とする速報で、「とうとう来た。余震はあるだろうな」と思った。

## ▼4月15日

車に最低限の装備を載せ、いつもより少し早く出社した。途中、停車している揺れを感じることもあった。

職場は揺れたとはいえ、比較的軽微な被害で通常業務を行える状況ではあった。その日は定時で退社し帰宅した。

持って行ったもののうち、寝袋と災害救助セットを車に置いたままにし、「もう使わないだろう」とキャンプ道具を降ろした。余震が来ることは想定していたが、いつものように就寝した。余震で倒れたら危険なため、寝室のタンスは、引き出しを出して横にしておいた。まさか、死

を覚悟するようなことになると思像もしなかった。

## ▼4月16日 午前1時25分

突然、突き上げるような揺れが来て目が覚めた。

「余震? いや、普通じゃない!」電気が止まったかと思ったら、



1階が土砂に押しつぶされ傾いた自宅

れた!」

家族4人で寝ていた。娘を守るような姿勢をしていたため、倒れてきた壁に潰されずに済んだ。寝ていた枕は潰れていた。妻も息子を守る姿勢をしていて、元の位置に戻ろうとしたら頭の位置に角材があった。密着した4人のスペースを残し家が潰れたのだった。すぐに声をかけ合った。「大丈夫か? 挟まれてないか?」全員無事が確認出来た。「良かった」奇跡的に4人も挟まれることもなく無傷だった。しかし、寝返りも困難なくらい狭い空間しか残っていない。

「閉じ込められた」  
ほとんど動きが取れない。手を伸ばすと、ふすまや天井板がある。これらは比較的軽く、動かすことは出来そうだった。ただ、その先は分からない。唯一手に取れた娘の携帯の明かりでは判別できなかった。枕の近くに置いていた携帯は、それ以降、二度と鳴ることがなかった。妻の携帯は瓦礫に

阻まれ、手に取ることは出来ない。娘の携帯ですぐに119番に電話しようとしたが、圏外になっていた。「基地局がやられたかな？」冷たい空気が少し入って来た。「窒息するのではない」

暗闇では外部との連絡手段がない以上、無理に動かない方が懸命だと思い、明るくなるのを待つことにした。娘の携帯は、数年使っているためバッテリーが心許ない。どのみち圏外で使えないのでバッテリーを温存するため電源を切ることにした。

救助を待つしかないが、いつ来るかは分からない。このまま出られなければ長く待つことになる。「最大72時間？」と思う。「トイレ行きたくなったらどうしよう」慌ても仕方がない。

誰かの声が聞こえたとき、大声を出して助けを呼ぼう。そのためにも「体力を温存しよう」、「眠ろう」と言った。もちろん、眠れるはずもないのだが。

余震が来るたび「もうダメかも」と思った。妻の携帯が「地震です、地震です」と鳴る。その恐怖は相当なものだった。

自分たちが無事だと確認できると、近所の人たちのことが気になった。「避難したのだろうか？」全く声が聞こえなかったからだ。実家のことも気になる。「どのくらいの規模(範囲)だったんだろう?」「職場の人たちは無事なのだろうか?」「しかし、瓦礫の中で情報も遮断されたままでは何も分からない。

夜が明けてくると外から光が漏れてきた。まさに希望の光だった。瓦礫の様子がうつすら見えた。ふすま、天井板、壁板などを視認できた。それらの瓦礫をのけていくと外が見えてきた。息子に「外に出られそうか?」と聞いた。「出られそう!」と答えた。「行くしかない!」さらに瓦礫をのけて逃げ道を確認した。外にはガラスの破片が落ちて

いる。踏むと怪我をするのは確実だった。ちょうどダンスの引き出しが横にあった。Tシャツなどをガラスの上に落とし、残ったTシャツを足に巻いた。そして「助けを呼びに行く」と最初に出た。すると妻が「出てもいい?」と聞いた。「いいよ、気をつけて。ガラスとがあるから」

外は既に明るかった。ただ、見慣れた風景はそこにはない。「ここはどこ?」あるはずの林は途中からなく、遠くまで見通せた。また、あるはずのない屋根がそこにあった。草をかき分け、やっと法面を降りたとき、空にはヘリが3機見えた。持ちだした突っ張り棒にTシャツを引っ掛け、大きく振ったが反応はなかった。報道のヘリだろう、そもそも期待はしてなかったのだが。

200mくらい歩いた先に近所の人たちが避難していた。「助かった!」「家族は全員無事、家から出てくるから下で保護して欲しい」とすぐに助けを求

めた。数人の人が助けに行ってくれた。何も履いてないことが分かると、靴を貸してくれた。

戻ってみると、妻と子どもたちが無事に出ていた。思わず抱きしめて泣いた。この時の安堵感は今までに感じたことがないものだった。

近所の人たちが喜んでくれた。夜中に避難するとき、声をかけてくれたそうだった。しかし、土砂と瓦礫に阻まれ、その声は届かなかった。

みんな限られたものしか持っていないのに、水と食料を分けてもらった。

集落から出る道が土砂でふさがっている。完全に孤立してしまった。「支援物資は来ない」「避難所でないところに支援物資を運んで来ることはまずない。

自宅前に行ってみると車が土砂に押し流され、隣の家の



車は土砂に押し流され隣の家の石に乗り上げた

大きな石に乗っていた。割れたガラスから手を入れてドアのロックを開け、寝袋と救助セットを取り出した。「これだけでもないよりましか」と。

一部の人はそこに残ると言っていたが、広域避難所(旧長陽西部小学校)へ向かった。

高橋さんはその後、東海大学体育館、久木野総合センターで避難所生活を送られました。現在、二次避難所で生活され、前向きな気持ちで過ごされています。